

外国語学習者の動機づけの測定方法—英語とロシア語、「必修科目」と「選択科目」の比較—

A Quantitative Comparison of Japanese Learners' Motivation to Learn English as a First Foreign Language and Russian as a First or a Second Foreign Language

ムヒナ・ヴァルヴァラ

Varvara Mukhina

Sophia University

(Received January 2019; accepted May 2019)

Abstract

This paper examines the importance of measuring learners' motivation to learn foreign languages and investigates the relevant diagnostic methods. Previous studies (Miyamoto et al. 2014) have applied expectancy-value theory to examine the specific characteristics of the motivation of learners of English as a first foreign language (EFFL) and Russian as a second foreign language (RSFL). Miyamoto et al. have indicated that the RSFL learners had lower 'utility' scores and higher scores in terms of time and effort 'costs' compared to the EFFL learners. Based on the findings, it appears that expectancy-value theory has great potential for use in the examination and comparison of the motivation levels of different groups of learners. However, the data collected were analysed to compare the group of learners studying English as a first foreign language (EFFL, a compulsory subject) and those pursuing RSFL (an elective or compulsory-elective subject, meaning that learners have to choose a prescribed number of subjects from a set group of subjects). Thus, the form of education—compulsory versus elective—may also influence these differences in motivation.

The author of this study employed the framework of Miyamoto et al. and compared their results with the motivation of the learners of Russian as a first foreign language (RFFL), a compulsory subject. A questionnaire survey was distributed to 69 first-year students and 60 second-year students at the Russian Department of Sophia University to collect the original data for this study.

The results of the study revealed that the motivation of RSFL and RFFL learners is still higher than that of EFFL learners. The fact that English is obligatory for all learners, regardless of whether they want to study it or not, may help explain this finding. On the other hand, despite some limitations, learners of Russian have a greater degree of freedom to choose Russian or some other language as an elective or even as a compulsory subject. However, this research also uncovered a difference in the motivation of RSFL and RFFL students, suggesting that distinct strategies should be employed to improve the motivation of learners of Russian as a compulsory or elective subject.

Keywords: *motivation, comparative approach, Russian learning, compulsory and elective subjects*

1 問題の所在

動機づけ (motivation) とは、教育や心理学、経営学や生物学など様々な分野で応用されている用語であるが、適用される分野が広く、その定義も同一の合意されたものは存在しない。例えば、ロッシンズによると、「モチベーションとは、何かをしようとする意志であり、その行動ができることが条件づけとなって、何らかの欲求を満たそうとすることである」と定義している (Robbins 1997, 水野他 2008:52 で引用)。有名なソ連・ロシアの心理言語学者は、「『動機』とは活動のエンジンである」と述べており (Leontiev 1980)、学習過程における動機づけの重要な役割を強調した。また、コビントンが皮肉を込めて指摘したように、「動機づけは、『重力』の概念と同様に、定義をするよりも (表面的に観察可能な効果を) 記述した方が簡単である」 (Covington 1998, Dornyei 2001:7 で引用)。つまり、「動機づけ」に共通した定義がなくても、ある人が該当課題を一所懸命に遂行している場合は、「動機づけが強い」と言われ、逆にあまりやる気がなければ「動機づけが弱い」と言われる。また、学習の過程においては、動機づけの重要性について合意されているが、動機づけの向上などに関しては未知なことが多い。しかし、「動機」が「活動のエンジン」であるとすれば、車検の際のエンジンの検査と同様に言語学習における動機づけを定期的に診断する必要がある。

外国語学習における動機づけの研究は、英語を対象とした研究が多い (Dornyei 2001; 楠木、工藤 2005; 吉田 2009; 永倉 2013; 神谷 2014 など)。国際的なコミュニケーションのツールである英語は、他の言語よりも応用性が高く英語能力も労働市場において高く評価されている。従って、英語学習への動機づけは他の言語に比べて高い可能性があり、英語学習を対象とした研究の成果が必ずしも他の言語学習に適用できるとは限らない。一方、グローバル化時代である現在、グローバルとローカルの関係性が議論され、グローバル・スタンダードの同一性と同時に多様性の保護と維持の問題が注目されるようになっている。例えば、英語教育においては、アメリカン英語やブリティッシュ英語という特定の地域を基準にしている英語の他に、非母語話者同士で使用される、いわゆる「リンガ・フランカ」 (Mauranen 2018) の学習に関心が高まっている。それと同時に英語以外のマイナーな言語の学習問題にも注目する必要がある。このようなマイナーな言語の一つが、ロシア語である。

下記の数値を見れば、日本におけるロシア語学習の規模がうかがえる。例えば、2014年現在の日本の大学数は738校であるが、ほとんどの大学(737校)で英語が教えられている。一方、ロシア語が学べる大学は147校のみであり、英語が学べる大学数に比べると、明らかに少ない。それは、フランス語(505校)、ドイツ語(498校)、中国語(498校)や韓国語(474校)に比べても少数である。ロシア語の学習プログラムを実行している高等学校も、2014年現在27校であり、フランス語(223校)、ドイツ語(107校)、中国語(517校)、韓国語(333校)に比べても少ない (Hayashida 2016: 32-33)。本稿は、このようなロシア語学習に見られる課題に注目しながら、他のマイナーな言語の学習にも示唆を与えることを期待している。

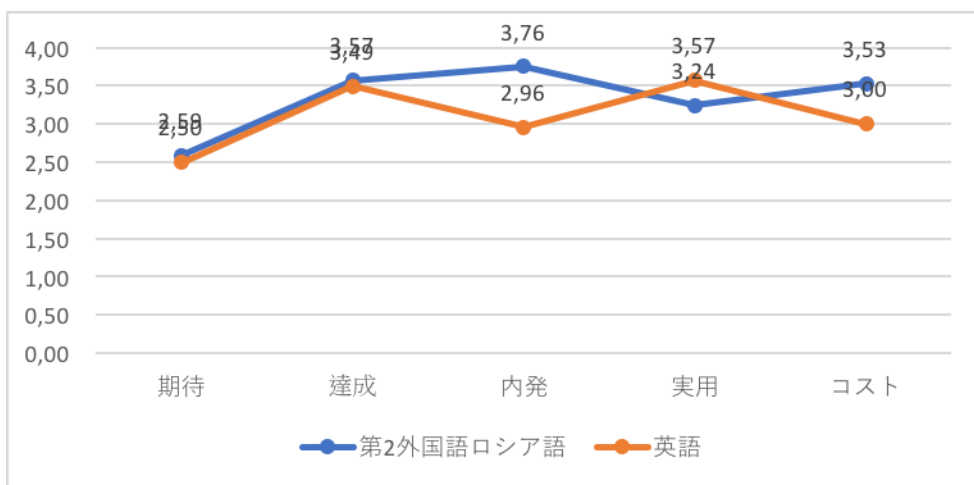
2 先行研究・理論枠組み

動機づけ研究の歴史は100年を超え、様々な分野における蓄積がある。20世紀の初めにマクドゥーガルとフロイトは、人間の行動への動機づけを非合理的な本能で説明した。20世紀の半ばごろの動機づけの研究は、動物学の視点からアプローチし、生物学的な要因と非生物学的な要因(学習された要因ともいう)について研究した。1960-1970年代は、マズロー

が、生理的欲求、安全の欲求、社会的欲求、自我欲求、自己実現の欲求を含めた欲求段階説を提案し、これらの欲求の充足が人間行動の動機づけになると指摘した。また 20 世紀の終わりに、動機づけは認知心理学の研究の焦点に置かれ、人間の目標や価値観や能力の視点から研究されるようになった。非合理的な本能や欲求に比べ、目標や価値観や能力は、個人による意識的な管理が可能であり、動機づけを向上させる方法の研究も可能となった。このアプローチは、多くの研究への道を切り開き、1990 年代には数多くの理論が発表された。例えば、期待価値理論 (Brophy 1999; Eccles and Wigfield 1995)、達成動機づけ理論 (Atkinson and Raynor 1974)、自己効力感理論 (Bandura 1997)、帰属理論 (Weiner 1992)、自己価値理論 (Covington 1998)、目標設定理論 (Locke and Latham 1990)、目標志向性理論 (Ames 1992)、自己決定理論 (Deci and Ryan 1985, Vallerand 1997)、社会的動機づけ理論 (Weiner 1994; Wentzel 1999)、計画的行動理論 (Ajzen 1988; Eagly and Chaiken 1993) などである。現在、動機づけの研究は、大きく分けると二つのアプローチに分類できる。一つ目は、「動機づけされた行動に影響を及ぼす変数の実態を明らかにする」内容論 (content theory) である (水野 2008)。二つ目は、動機づけされた行動が呼び起こされ、どの方向に進み、持続させられ、やがて終わるのかという過程を説明する変数を明らかにするプロセス論 (process theory) である (同上)。本研究は、後者のアプローチに近く、ある行動をするかしないかという選択に影響を及ぼす要因ではなく、選択された行動の持続性やその行動に付与されているエネルギーの程度、その変異に注目する。

本稿の理論枠組みおよび調査方法は、宮本他を参考にした。宮本他は、2012 年にロシア語を第 2 外国語として学んでいる学習者を対象に大規模な調査を実施し、2014 年にその結果を発表した。その研究は、「期待・価値理論」の応用性と希望を示した。調査対象者は、主に選択科目・選択必修科目としてロシア語を学習している学生 (主に 1・2 年生) であり、アンケート調査の回答者数は 1113 人である。

宮本他の調査では、動機づけのメカニズムを説明する「期待・価値理論」が適用され、ロシア語の学習者 (第 2 外国語 [主に選択]) と英語の学習者 (第 1 外国語 [必修]) の動機づけの比較が実施された。期待・価値理論によると、学習者の動機づけは「その課題をいかに首尾よく遂行できると考えているのか (=期待)、またその課題を遂行することにどのような価値を見いだしているのか (=価値)」によって左右される (宮本他 2014; Wigfield and Eccles 2000)。そのような「成功への期待」と「価値」が高ければ、その課題への動機づけが高くなる。また、「価値」の要素は、さらに「達成価値」、「内発的価値」、「実用価値」と「コスト」という四つの構成要素に分けられる。「達成価値」は、その当該課題を遂行するのが、自分にとってどのくらい重要なのかを示している。「内発的価値」は、その当該課題を遂行することが自分にとってどのくらい楽しいのか、どのくらい好きなのかを示す要因である。「実用価値」は、その課題を遂行することが個人の将来計画にどのくらい合致し、どのくらい役に立つと思われるのかを示している。また、「コスト」とは、該当課題を遂行するのにどのくらい負担になるかを表している。「達成価値」、「内発的価値」、「実用価値」の三つの要因は数値が高ければ高いほど動機づけが強くなる。一方、「コスト」は動機づけと負の関係にあり、数値が高くなるほど動機づけが弱くなる (宮本他 2014: 13)。



グラフ1 第2外国語としてのロシア語学習の動機づけ
(宮本他のデータに基づき 著者作成)

宮本他のアンケート調査の結果（グラフ1）から、日本におけるロシア語学習（第2外国語〔主に選択〕）は「成功への期待」が低く、「達成価値」を強く感じるようになった。その数値は英語（第1外国語〔必修〕）とほぼ同様である。つまり、ロシア語（第2外国語〔主に選択〕）の学習に関して、英語（第1外国語〔必修〕）の学習に関して学習者は、それぞれの勉強課題を遂行することが重要であると感じながら、それによって成功するとは思わない者が多いことが分かった。また、英語（第1外国語〔必修〕）の学習者に比べて、ロシア語（第2外国語〔主に選択〕）の学習者は、「内発的価値」が高く、「コスト」を強く感じていることが明らかになった。つまり、第2外国語〔主に選択〕としてロシア語を学んでいる者は、ロシア語が好きで楽しいと思っているが、難しく「負担でもある」と感じていることが分かった。さらに、「実用価値」という面では、英語（第1外国語〔必修〕）の学習に比べて、ロシア語（第2外国語〔主に選択〕）の学習は数値が比較的低い。つまり、英語（第1外国語〔必修〕）の学習は、「将来、役に立つ」と感じ、そのゴールを「達成するのが重要である」と感じているが、学習のプロセスそのものは「楽しい」と感じていない者が多いと言える。一方、ロシア語学習（第2外国語〔主に選択〕）では、勉強自体は「楽しい」と思っているが、「ロシア語がマスターできる」ことで「将来、役に立つ」とは思わない者が多いことが宮本他（2014）の調査から分かった。

しかし、宮本他の調査で比較対象となったのは、第1外国語〔必修〕の英語の履修者と第2外国語〔選択〕のロシア語の履修者であったため、「ロシア語」と「英語」の違いに加え、「必修科目」と「選択科目」の違いも検討する必要がある。なぜなら、第1外国語〔必修〕の英語の場合、ほとんどの大学において学習者の意思とは関係なく、履修せざるを得ない。また、その単位を取得しなければ大学を卒業することができない。一方、第2外国語〔選択〕の場合、学習者は科目の選択においてある程度の自由を持ち、その単位を取得できなかった場合は、他の科目を選択することもできる¹。また、第1外国語〔必修〕のロシア

¹ もちろん、時間割の関係で興味がある科目を履修できず、興味がない科目を選ばないといけな場合もあり、選択科目でもやむを得ず履修している学習者がいることも念頭に置くべきである。また、大学によっては「選択科目」の中から履修せざるを得ない科目数が決定されており、事実として、特定の〔選択科目〕の単位を取得しなければ卒業できない

語の場合、必修科目として単位を取得しなければ、大学を卒業することができないが、第1外国語 [必修] の英語に比べて、他の選択肢の中から自らの意志で選んでいる²。

表1 履修科目としての、第1外国語 [必修] の英語とロシア語および第2外国語 [選択] のロシア語の特徴

	第1外国語 [必修] の英語	第1外国語 [必修] のロシア語	第2外国語 [選択] のロシア語
選択の自由	ない	ある	ある
履修中止の自由	ない	ない	ある

以上の比較から、第1外国語 [必修] のロシア語は、第1外国語 [必修] の英語と第2外国語 [選択] のロシア語の特徴を一部共有しているが、異なる部分もあることがわかる。したがって、第1外国語 [必修] のロシア語の学習者の動機付けも、宮本他 (2014) の調査結果とは異なる「パターン」を示すと思われる。

本研究では、宮本他 (2014) の動機づけの測定方法を応用し、第1外国語 [必修] としてロシア語を学んでいる大学生の動機づけや第1外国語 [必修] としての英語や第2外国語 [主に選択] との比較を実施する。そのため、ロシア語を第1外国語 [必修] として履修している1年生と2年生 (上智大学外国語学部ロシア語学科の必修科目である「基礎ロシア語I」と「基礎ロシア語II」) を対象とするアンケート調査を実施し、宮本他 (2014) のアンケート調査のデータと比較した。

3 調査方法

先行研究に基づき、宮本他 (2014) と同様の質問項目を使用し、ロシア語を第1外国語 [必修] としている学習者を対象に調査を実施した。調査方法としては、それぞれの学年において合同で実施される必修科目の際に、アンケート用紙を配布し、調査の目的やデータの使用方法について説明した上、匿名で記入してもらった。調査の対象者は、大学の1年生と2年生であり、回答者数は1年生が69人、2年生が60人である。アンケート調査の実施日は、1年生が2018年5月21日で、2年生が2018年5月18日である。該当日は、春学期の第5週である。アンケート調査の言語は、学習者の母語である日本語で行った。質問項目は、添付-1の通りである。

こともある。しかし、多くの場合、「必修科目」は「選択科目」より履修するかしないかという点において自由度が低いと考えられる。

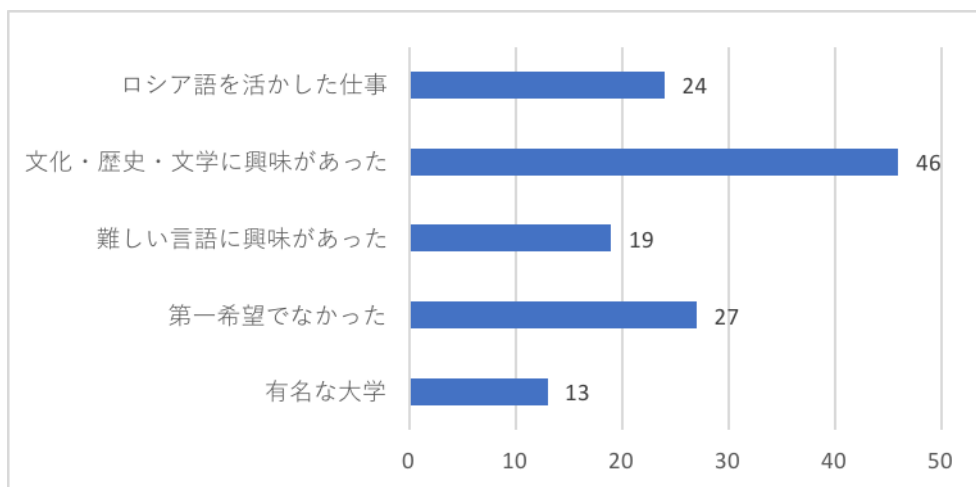
² この点においても、興味があるかないかを問わずロシア語を選ばざるを得ない人もいることを断っておきたい。例えば、ロシア語は第一希望ではなかったが、「他の選択肢よりまし」と判断して選ぶ人もいる。しかし、その場合でも、選択の余地のない第1外国語 [必修] の英語よりは、自由度が高いと思われる。

4 アンケート調査の結果

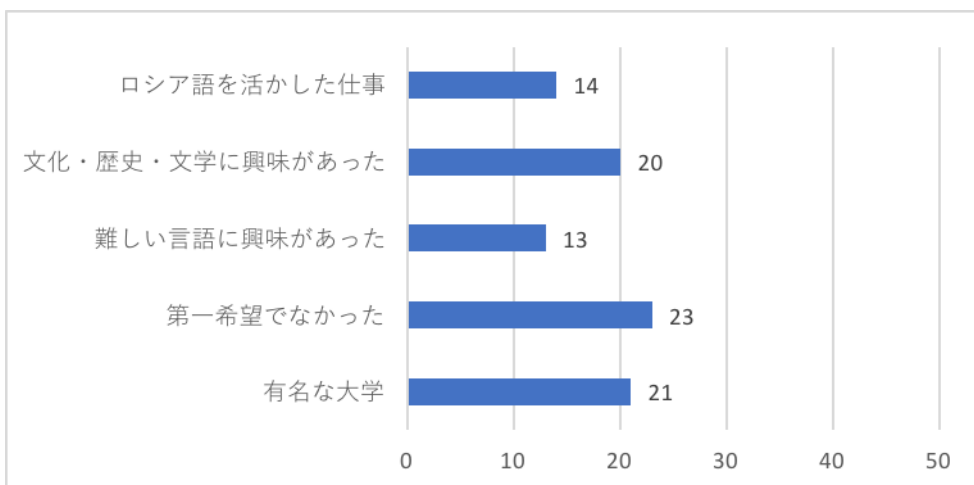
4.1 アンケート調査の対象者の属性

まずは、4.1 でロシア語を第1外国語 [必修] として学んでいる大学生の属性について述べ、4.2 で第1外国語 [必修] のロシア語、第2外国語 [選択] のロシア語、第1外国語 [必修] の英語学習の比較を実施する。

ロシア語学科への入学の理由について、1年生は「ロシアの文化・歴史・文学などに興味を持ったから」という回答 (46人) が最も多かった。また、いくつかの学科の入学試験を受け、ロシア語学科は第一希望ではなかったが、他の学科に入れなかったためロシア語学科を選んだ学習者がいる。このように「第一希望ではなかった」と回答した学習者と「ロシア語を生かした仕事をしたいから」と回答した学習者が比較的多かったが、全体として、1年生は、ロシアの文化に興味を持ち、将来、仕事でロシア語を使いたいという内発的動機づけを持っている者が多いと言える (グラフ2)。一方、2年生は「第一希望ではなかった」、「有名な大学を卒業したかったから」、「ロシアの文化・歴史・文学などに興味を持ったから」と回答した人数 (23人、21人、20人) がほぼ同じである (グラフ3)。つまり、1年生は、最初からロシア・ロシア語に興味を持って、学習し始めた者が多いが、2年生に関しては、ロシア・ロシア語に興味を持った者とロシア語学習以外 (有名な大学を卒業するなど) の外発的動機に基づいてロシア語学科に入学した者の割合が同じぐらいである。

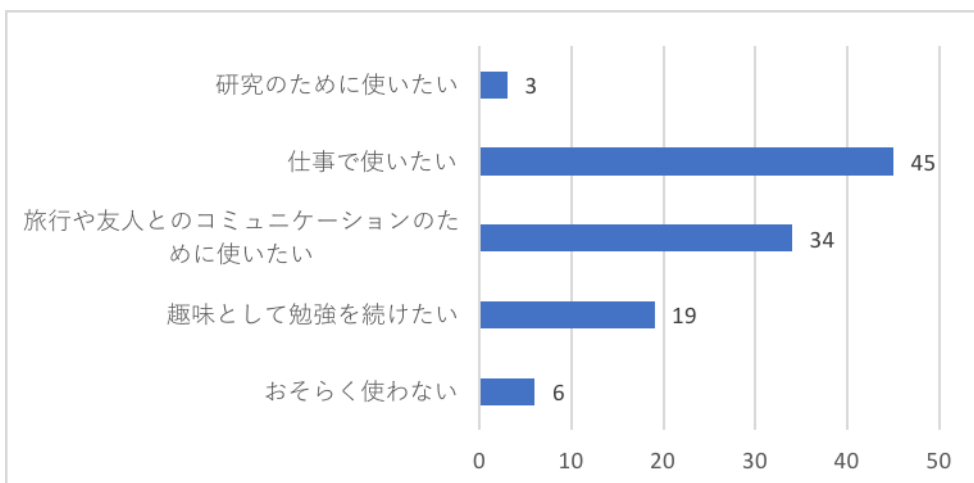


グラフ2 上智大学のロシア語学科への入学理由 (1年生 複数回答可)

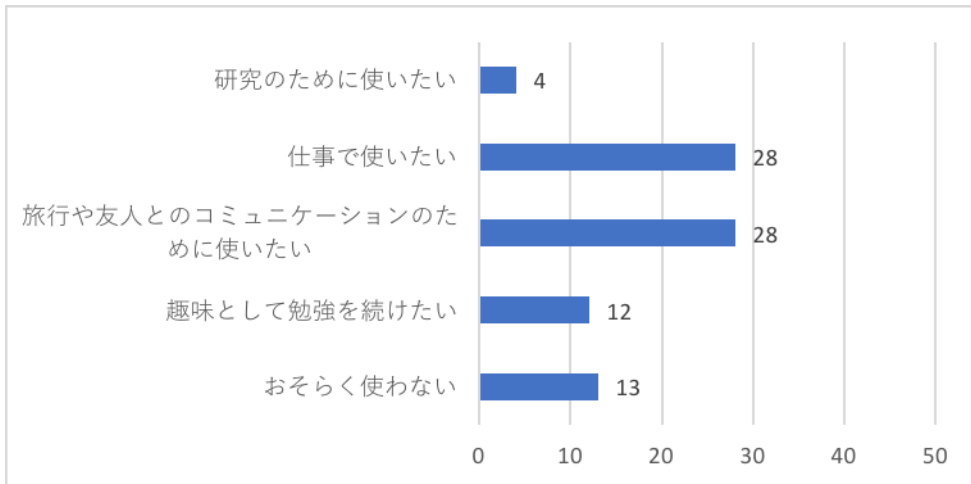


グラフ3 上智大学のロシア語学科への入学理由（2年生 複数回答可）

次に、卒業後にロシア語を活用する見込みについての調査結果をまとめたい。1年生と2年生においては、卒業後に仕事（45人と28人）や、旅行や友人とのコミュニケーションをとるために（34人と28人）ロシア語を使いたいと答えた者が多かった（グラフ4とグラフ5）。また、1年生の方が仕事でロシア語を活用したいと答えた者が多かった。その理由として入学の動機づけの違いも考えられるが、1年目から2年目に上がると学習内容が難しくなり、仕事でロシア語を活用することをあきらめる者が増えることも考えられる。その点を明確にするためには、同じ学年に対する追跡調査が必要であるが、2年生に比べて1年生の方がロシア語を活用したキャリアを考えている者が多いと言える。

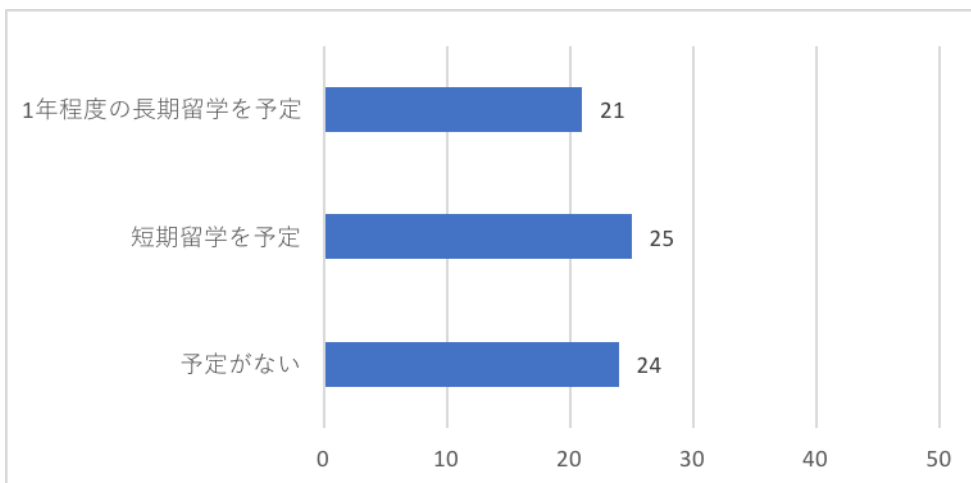


グラフ4 卒業後にロシア語を活用する見込み（1年生 複数回答可）

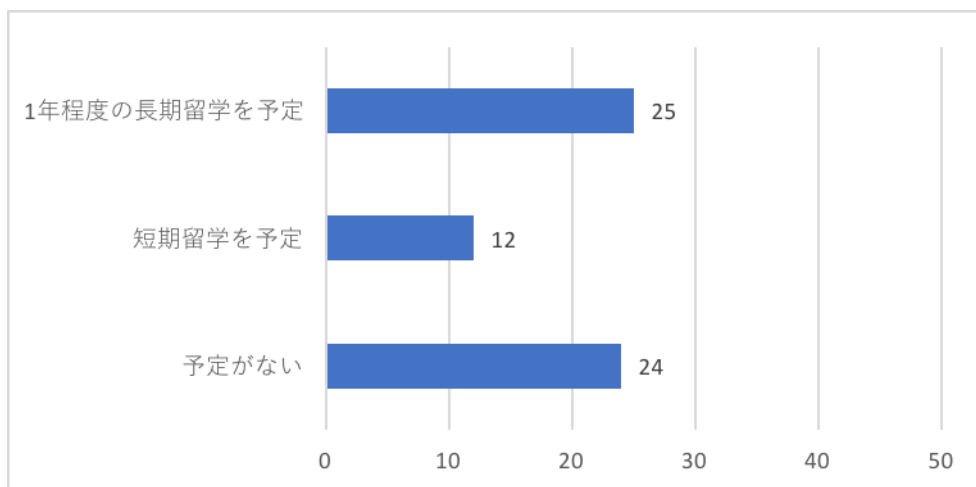


グラフ5 卒業後にロシア語を活用する見込み（2年生 複数回答可）

ロシアへの留学の予定に関して、留学の「予定がない」という回答が1年生と2年生で共に24人いる。これは、それぞれの学年の3分1程度の人数である（グラフ6とグラフ7）。一方、回答者の70%程度は、ロシア語圏諸国への短期留学もしくは1年程度の長期的留学を予定している。近年は、夏休み中のプーシキン記念ロシア語大学への短期留学や10カ月の交換留学を含め、ロシア語圏諸国へ留学する機会が増えている。ロシア語学科生の3分の1程度が長期的留学を経験している。ロシア語圏諸国への留学は、ロシア語学習の「実用」という要素にポジティブな影響を与える可能性があり、今後、データの蓄積に伴い留学の予定と学習への動機づけの相関関係を検証してみたい。



グラフ6 留学の予定（1年生 複数回答不可）



グラフ7 留学の予定（2年生 複数回答不可）

4.2 学習言語と履修登録形態による動機づけの違いの比較

最後に、「英語」と「ロシア語」という学習言語に規定される動機づけの違いと、「必修科目」と「選択科目」という履修登録形態による違いを検討する。比較対象として、第1外国語〔必修〕の英語の学習者と第2外国語〔選択〕のロシア語学習者（両者は、宮本他の調査結果の二次データの分析である。）と第1外国語〔必修〕のロシア語学習者（独自のアンケート調査のデータ分析）のデータを用いる。比較を可能にするため、本研究では宮本他が使用した質問項目と同様の質問項目を使った。

グラフ8（11頁）に示したように、全体的に第1外国語〔必修〕の英語の学習者に比べ、第1外国語〔必修〕のロシア語と第2外国語〔選択〕のロシア語の学習者のほうが動機づけにおいて高い数値を示している。これは、ロシア語を選択科目として学んでいる学習者と必修科目として学んでいる学習者の両方に言える。さらに具体的にみると、第2外国語〔選択〕としてロシア語を学んでいる学習者は、「内発的価値」が最も高いが、「将来、ロシア語を活用できる」と思っている人は少ないのが特徴である。第1外国語〔必修〕としてロシア語を学んでいる1年生は、動機づけに関して、最も高い数値を示しており、第1外国語〔必修〕の英語の学習者のグラフと「M字型」の形が類似している（グラフ8、11頁）。第1外国語〔必修〕としてロシア語を学んでいる2年生は、全体的に動機づけの数値が1年生より低く、学習の「コスト」が高いことが分かる。また、興味深いのは、四つのグループとも「成功への期待」の数値が低く、全体的に第1外国語〔必修〕の英語も第1外国語〔必修〕のロシア語と第2外国語〔選択〕のロシア語もマスターできるとは思っていない者が多い。これは、日本語と英語、ロシア語との言語的距離が遠いことによって説明できる（Chiswick and Miller 2008）。次に、それぞれの動機づけの要素に対する比較を行いたい。

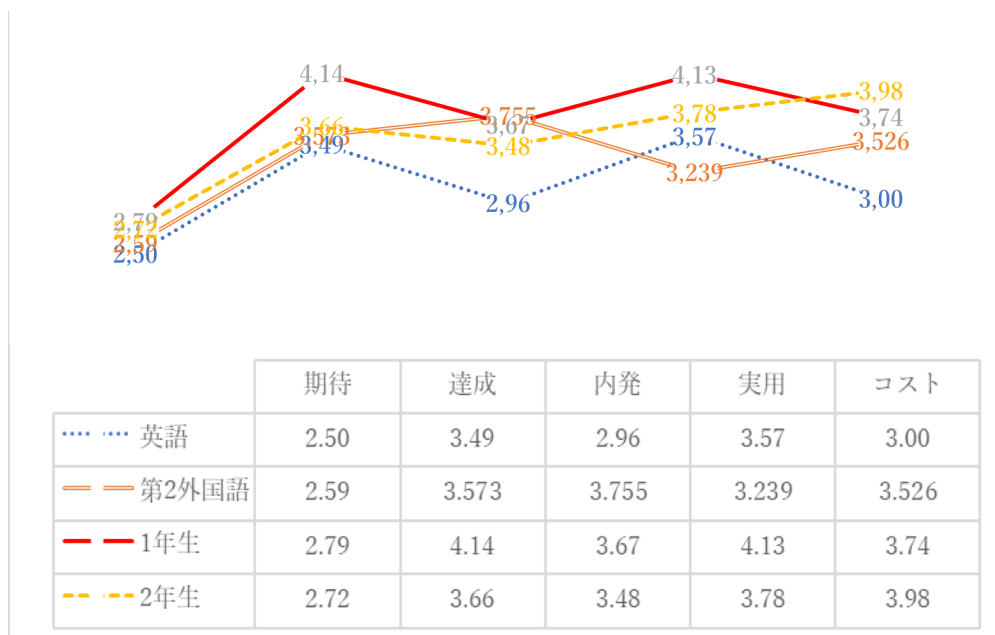
「達成価値」に関しては、第1外国語〔必修〕の英語に比べて、第1外国語〔必修〕のロシア語の学習者と第2外国語〔選択〕のロシア語の学習者は数値が高く、ロシア語で良い成績をとることが大事だと思う者が多い。その数値は、学習期間がまだ短く、必修科目としてロシア語を学んでいる1年生が特に高い。本アンケート調査は、春学期の半ばに実施したため、1年生の学習者はロシア語の成績がまだ決定しておらず、その学年における成績の順位が決まっていない。そのような「不安な要素」は、「達成価値」を高める要因の一つであると考えられる。

「内発的価値」に関しては、第1外国語〔必修〕の英語の学習者よりも第1外国語〔必修〕のロシア語の学習者と第2外国語〔選択〕のロシア語の学習者のほうが高い数値であるが、「選択科目」としてロシア語を学んでいる学生に比べ、「必修科目」としてロシア語を学んでいる学習者のほうが低い数値となっている。さらに、第1外国語〔必修〕のロシア語の学習者は、1年生より、2年生の「内発的価値」が低いことが明らかになった。つまり、この要素に関して、ロシア語と英語の違いだけではなく、「選択科目」と「必修科目」という履修登録形態による違いが明らかになった³。「選択科目」は、授業の内容を面白くしなければ履修者が減るという問題があるため、授業の内容を面白くすることに力を入れていると思われる。他方、授業が面白いと思わない学習者は、その授業の履修を中止することができるので、授業を受け続けている学習者は「内発的価値」を強く感じている者が多いと考えられる。

「実用価値」に関しては、学習している言語よりは、履修登録形態の影響が強く表れている。「実用価値」の数値が最も低いのは、第2外国語〔選択〕としてロシア語を学んでいる学習者である。逆に高い順に並べると、第1外国語〔必修〕のロシア語の1年生、第1外国語〔必修〕のロシア語の2年生、第1外国語〔必修〕の英語の学習者、第2外国語〔選択〕のロシア語の学習者という順になる。という順になる。1年生の数値が特に高い理由として、いくつかの理由が考えられる。まずは、入学の理由で述べたように第1外国語〔必修〕のロシア語の1年生においては「ロシア語を活かした仕事をしたいから」という回答(24人)が多かったが、それも理由の一つであると言える。また、1年生のほうが、新しい言語を学習し始めたことによる「新鮮さ」という要因がそのような「楽観的な」評価につながり、時間とともにその数値が下がることも考えられる。その点を明確にするためには、追検証を行う必要がある。

「ロシア語学習に関わるコスト」に関しては、第1外国語〔必修〕の英語の学習者に比べ、第1外国語〔必修〕のロシア語の学習者と第2外国語〔選択〕のロシア語の学習者のほうがコストを高く感じるということが明らかになった。それは、「選択科目」に対しても「必修科目」に対しても同様であるが、「必修科目」のほうがコストを高く感じるということが明らかになった。その理由は、第1外国語〔必修〕としてロシア語を学習する場合、学習のプログラムがより難しく、覚える量もより多いことや、履修登録の中止ができないので、ロシア語を勉強すること自体に負担を感じるからではないかと考えられる。また、1年生に比べて2年生は学習内容が難しくなるため、2年生の「コスト」の数値がさらに高くなっていると思われる。つまり、「ロシア語学習に関わるコスト」という要因に関しては、ロシア語そのものの難しさと、「選択科目」と「必修科目」という履修登録形態の要因が同時に働き、学習への動機づけに影響を与えていると考えられる。

³ アンケート調査では、「内発的動機づけ」を計る項目が二つ含まれており、添付-1(17頁)が示しているように、C)「ロシア語を学習するのが好きだ」とM)「ロシア語を学習するのが楽しい」という項目に該当する。その質問項目に対しては、①「全くそう思わない」から⑤「とてもそう思う」まで5段階評価で回答者自身によって内発的動機づけが評価されている。また、この質問項目も宮本他の先行研究を参考にしている。1年生と2年生のデータを見れば、「③どちらとも言えない」と回答した者は1年生が22人で、2年生が21人である。つまり、それぞれの学年の3分の1は授業に関して面白いかどうかに関してどちらとも言えないという回答であった。それに対して授業が楽しめている者とそうではない者が3分の2いるが、授業が楽しめている者のほうが少し多い。



グラフ8 第1外国語 [必修] の英語と第1外国語 [必修] のロシア語と第2外国語 [選択] のロシア語学習者の動機づけの比較

5 考察

本アンケート調査の分析から、次のようなことが明らかになった。まず第一に、全体的に第1外国語 [必修] の英語の学習への動機づけに比べて、第1外国語 [必修] のロシア語と第2外国語 [選択] のロシア語の学習への動機づけの方が高いことである。国際コミュニケーション言語である英語は、実用価値が高いことから、英語学習への動機づけの方が高いことを予想していたが、アンケート調査から予想とは反対の結果になることが明らかになった。その理由として、英語は「必修科目」であるため、学習者の意思を問わず学ばされることが多いからだと考えられる。一方、ロシア語は第2外国語 [選択] の場合でも、第1外国語 [必修] の場合でも学習者が何らかの理由をもって自ら選んでいることから学習への動機づけが高いことが説明できる。つまり、外国語学習においては、当該言語を自らの意思で選択したか否かが重要な動機づけの要因であると考えられる。

また、ロシア語を「必修科目」として学習している学生と、「選択科目」として学習している学生の間で違いが見られた。「選択科目」としてロシア語を学習している者は、ロシア語を選んで「好きでやっている」ことから、「内発的価値」が高いが「実用価値」の数値は低い。「必修科目」としてロシア語を学習している1年生は、ロシア語学習が「新鮮」であり、プログラムの内容が比較的難しくないことから学習への動機づけが最も高い。2年生は、学習の「新鮮さ」が薄くなり、プログラムの難易度が上がることによって「コスト」を高く感じており、そのため1年生よりも動機づけの数値が低い。また、全体的に学習のコストが高い点は、ロシア語学習の特徴として挙げるができるが、特に「必修科目」としてロシア語を学んでいる学生は非常に高いコストを感じている。

本研究は、学習者の動機づけの診断の重要性を明らかにし、それぞれ特定のグループの動機づけの特徴を掴む可能性を示した。例えば、第2外国語〔選択〕として学習している者に対しては、「ロシア語の実用」という要因を向上させることが必要であるのに対し、第1外国語〔必修〕として学習している者にとっては、「内発的な価値」を向上させ、「ロシア語学習に関わるコスト」を低下させることが課題である。また、英語も含めて四つのグループに関して、「成功への期待」の向上が学習への動機づけの向上につながると言える。その意味で、「期待・価値理論」は、それぞれの学習グループに適した改善方法に示唆を与える、有望な診断方法であると思える。

今後の課題

本研究は、宮本他（2014）の先行研究の枠組みを参考に「英語」と「ロシア語」および「必修科目」と「選択科目」という要素の組み合わせが言語学習者の動機づけに与える影響の分析を試みた。最後に、データの限界と今後の課題に触れたい。本研究は、ロシア語教育が実施されている日本全国の複数の大学の比較を行ったが、大学ごとに履修制度に特性がある。そのため、大学による履修制度の特性を把握し、それらの構造的な特徴が学習者の動機づけに与える影響をより明確にする必要がある。また、第1外国語〔必修〕のロシア語の学習者に対し、1年生と2年生の比較を行ったが、7頁で示したように学年により、ロシア語学科への入学理由に違いが見られた。従って、1年生と2年生の動機づけの違いにおいて、当初のロシア語学科への入学理由による影響も考慮せざるを得ない。また、宮本他（2014）のアンケート調査は、1000人を超える大規模な調査であったため、推測統計の分析も可能であった。一方、本研究のアンケート調査は、規模が小さいため本稿は記述統計の分析だけに留める。

今後の課題としては、第1外国語〔必修〕の学生のデータを蓄積し、最終的に推測統計学的な分析も実施したい。また、1年生と2年生の動機づけの違いに関しては、本研究の対象者に追跡調査を行い、動機づけの変異を明らかにすることを予定している。なお、データを蓄積し、従来のロシア語学科への入学の理由や卒業後にロシア語を活用する見込みなどの要因がロシア語学習の動機づけに与える影響を明確にしたい。

謝辞

本稿を作成するにあたり、貴重なコメントをしてくださった秋山真一准教授に感謝する。

参考文献

- 宮本友介、横井幸子、林田理恵「日本のロシア語学習者の動機づけについて—期待・価値理論に基づく考察」『ロシア語教育研究』第5号、pp. 13-20, 2014.
- Ajzen I. *Attitudes, Personality and Behavior*. Chicago: Dorsey Press, 1988.
- Ames C. Classrooms, goals, structures and student motivation. In *Journal of Educational Psychology*, 84, pp. 267-271, 1992.
- Atkinson J. and Raynor J. (Eds.) *Motivation and Achievement*. Washington, DC: Winston and Sons, 1974.
- Bandura A. *Self-Efficacy: The Exercise of Control*. New York: Freeman, 1997.
- [Bondarenko O.] Бондаренко О. Чему учат в школе? — Из опыта преподавания русского языка в старшей средней школе Фусики для школьников с низкой мотивацией. 『ロシア語教育研究』創刊号、pp. 47-64, 2010.
- Brophy J. Toward a model of the value aspects of motivation in education: Developing appreciation for particular learning domains and activities. In *Educational Psychologist*, 34, pp. 75-85, 1999.
- Chiswick B. and Miller P. Linguistic Distance: A Quantitative Measure of the Distance Between English and Other Languages. In *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, pp. 1-11, 2008. <https://www.tandfonline.com/doi/pdf/10.1080/14790710508668395> (2019年4月12日閲覧)
- Covington M. *The Will to Learn: A Guide for Motivating Young People*. Cambridge: Cambridge University Press, 1998.
- Deci E. and Ryan R. *Intrinsic Motivation and Self-Determination in Human Behavior*. New York: Plenum, 1985.
- Dornyei Z. *Motivational strategies in the language classroom*. Cambridge University Press, 2001.
- Eagly A. and Chaiken S. *The Psychology of Attitudes*. New York: Harcourt Brace, 1993.
- Eccles A. and Wigfield A. In the mind of the actor: The structure of adolescents' achievement task values and expectancy-related beliefs. In *Personality and Social Psychology Bulletin*, 21, pp. 215-225, 1995.
- [Hayashida] Хаясида Р. В каком направлении должно двигаться сегодня преподавание русского языка в Японии. Русский язык за рубежом: учебно-методический иллюстрированный журнал. Русистика Японии, pp. 29-38, 2016.
- 神谷雅仁「英語学習を促進させる動機付けと環境づくり—学生生活実態調査から見てきた学生像の分析から—」In *Sophia University Junior College Division Faculty Journal*, 創刊 40周年記念第35号』pp. 89-103, 2014. https://www.jrc.sophia.ac.jp/pdf/research/bulletin/2014_35_10.pdf (2019年4月12日閲覧)
- 楠木理香、工藤多恵「外国語学習の動機に関わる要因 —アンケート・面接調査結果による一考察—」『立命館法学山口幸二先生退職記念集』pp. 139-164, 2005. <http://www.ritsume.ac.jp/acd/cg/law/lex/kotoba05/kusuki-kudou.pdf> (2019年4月12日閲覧)
- [Leontyev] Леонтьев А. Некоторые проблемы обучения русскому языку как иностранному (психолингвистические очерки) — М.: Изд. МГУ, 1980.
- Locke E. And Latham G. *A Theory of Goal Setting and Task Performance*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall, 1990.

- [Maloshonok et al.] Малошонов Н., Семёнова Т., Терентьев. Учебная мотивация студентов российских вузов: возможности теоретического осмысления. *Вопросы образования* №3, pp. 92-121, 2015.
- Mauranen A. Second Language Acquisition, World Englishes, and English as a Lingua Franca (ELF). In *World Englishes*. 37, 1, pp. 106-119, 2018.
- 水野基樹、川田裕次郎、飯田玲依、山本真己、東慎治、上野朋子、山田泰行、杉浦幸、田中純夫「モチベーション研究における動機概念に関する理論的整理 — McClelland の所説に基づいて —」『千葉経済大学短期大学部研究紀要』第4号、pp. 51-61, 2008. <https://ci.nii.ac.jp/naid/110006742548> (2019年4月12日閲覧)
- 永倉由里「英語授業で動機づけと自律を促す意義とその可能性」『常葉大学短期大学部紀要』44号、pp. 33-46, 2013. https://ci.nii.ac.jp/els/contentscinii_20181220055242.pdf (2019年4月12日閲覧)
- [Tachibana and Higashi-Shatohina] Татибана Ё, Хигаси-Шатохина Г. Тестирование по русскому языку детей и взрослых в Японии (2001-2016 гг). *Русский язык за рубежом: учебно-методический иллюстрированный журнал. Русистика Японии*, pp. 52-56, 2016.
- Vallerand, R. Toward a hierarchical model of intrinsic and extrinsic motivation. In *Advances in Experimental Social Psychology*, 29, pp. 271-360, 1997.
- Weiner B. *Human Motivation: Metaphors, Theories and Research*. Newbury Park, CA: Sage, 1992.
- Weiner B. Integrating social and personal theories of achievement motivation. In *Review of Educational Research*, 64, pp. 557-573, 1994.
- Wigfield A., Eccles J. S. Expectancy-value theory of achievement motivation. In *Contemporary educational psychology*, 25 (1), pp. 68-81, 2000.
- Wentzel K. Social-motivational processes and interpersonal relationships: Implications for understanding motivation at school. In *Journal of Educational Psychology*, 91, pp. 76-97, 1999.
- 吉田国「語学学習における動機づけに関する一考察」『武蔵工業大学環境情報学部紀要』第10号、pp. 108-113, 2009. <http://www.comm.tcu.ac.jp/kiyou/no10/1-13.pdf> (2019年4月12日閲覧)

添付—1 ロシア語学習の動機についてのアンケート

- ① 大学におけるロシア語学習歴は何年目ですか。
A) 1年目 B) 2年目 C) 3年目以上
- ② 上智大学のロシア語学科に入学した理由を選んでください（複数回答可）。
1. 有名な大学を卒業したかったため。
 2. 第一希望は他の大学・学科であったが、そこには入れなかったため。
 3. 難しい言語を勉強したかったため。
 4. ロシアの文化・歴史・文学などに興味があったため。
 5. 大学卒業後は、ロシア語を活かした仕事をしたいため。
- ③ 卒業後は、ロシア語をどのように使いたいと思うか（複数回答可）。
1. 卒業後はおそらくロシア語を使わないと思う。
 2. 卒業後は趣味としてロシア語の勉強を続けたいと思う。
 3. 卒業後は旅行や友達とのコミュニケーションのためにロシア語を使いたいと思う。
 4. 卒業後はロシア語を仕事で使いたいと思う。
 5. 卒業後はロシア語の研究を続けてロシア語を教えたいと思う。
- ④ ロシアへの留学の予定について教えてください。
1. 留学を予定していない。
 2. 短期留学を予定している。
 3. 長期留学（1年程度）を予定している。
- ⑤ 下記の質問には「①全くそう思わない」～「⑤とてもそう思う」の中、適切な回答を選んでください⁴。
- A) ロシア語の授業でいい成績をとることは、私にとって重要である。
1. 全くそう思わない 2. そう思わない 3. どちらとも言えない 4. そう思う 5. とてもそう思う
(以下は省略)
- B) ほかのクラスメイトと比べて、私はロシア語ができるほうだと思う。
- C) ロシア語を学習するのが好きだ。
- D) 私にとってロシア語はむずかしい。
- E) ロシア語の授業で学習したことはマスターしていると思う。
- F) ロシア語をマスターできると思う。
- G) 授業時間外には、他にしたいことがあるので、ロシア語を勉強するのはつらい。
- H) ロシア語の期末試験でいい成績をとれると思う。
- I) 自分のロシア語学習の目標を達成できると思う。

⁴ 宮本他（2014）を参考にし、下記の質問事項を基に達成（A、J、N、O）、期待（B、E、F、H、I）、内発（C、M）、コスト（D、G、K、L）、実用（P、Q）という因子に分類した。その後は、それぞれの項目の平均値を計算し、因子ごとに平均値を計算した。因子ごとの計算結果が、グラフ7でまとめた。

- J) ロシア語的な物の見方ができるような人になることは私にとって大事である。
- K) ロシア語の授業でいい成績をとるにはかなり努力しなければならない。
- L) ロシア語を学習するのは、いろいろな意味で重荷になっている。
- M) ロシア語を学習するのは楽しい。
- N) さまざまな場面でロシア語がうまく使えるようになることは私にとって重要なことだ。
- O) ロシア語をマスターするために努力することは私にとって価値のあることだ。
- P) ロシア語の授業で学んでいることは、将来、役に立つと思う。
- Q) ロシア語ができるようになることは、将来、私のやりたいことをするのに役に立つ。